

北海道支部ニュース 第47号

日本分析化学会 北海道支部 2013 年 7 月

支部長挨拶



日本分析化学会北海道支部長
黒澤 隆夫
(北海道医療大学)

2013 年度の日本分析化学会北海道支部長を仰せつかりました黒澤でございます。今まで、忙しさに呆けて、北海道支部の行事にはほとんど参加せず、いまさら支部長をお引き受けするのは心苦しい次第でございます。しかしながら、本支部の発展には多くの会員の皆様と歴代の支部長の先生方の熱心な働きがあったことを思うとき、微力ながらも支部の発展に寄与していくことが務めと改めて身の引き締まる思いでございます。

私は北大大学院時代に専門として合成を中心とする有機化学を専攻しておりました。丁度、大学院修了時に東日本学園大学(現北海道医療大学)薬学部が開設され、藤間先生が薬品分析化学教室の初代教授として赴任されることになり、助手としてご一緒させていただきました。爾来、藤間先生のご指導の下、乏しい有機化学的知識と技術を使って生体成分の微量定量分析法の開発と医療への応用を心がけてまいりました。藤間先生が日本分析化学会の北海道支部長を務められた時に、庶務幹事として分析化学会に入会したことが本会との始めてのかかわりでありました。

藤間先生の定年退職後、約 15 年間にわたり、北海道医療大学 薬学部 薬品分析化学講座の教授を務めさせていただきました。その間、“分析”という名前にあった仕事を心がけるように意識してまいり

ました。現在は、北海道医療大学 副学長の任についておりますが、研究への情熱は持ち続けるように心がけております。その意味でも、今年度の支部長を引き受けさせていただくことは、私に取りまして研究の励みにもなることと感謝しております。

さて、先日、北海道支部として最大の当番行事の一つである「分析化学討論会」が函館で開催されました。実行委員長の板橋先生や実務を仕切られた宇都先生はじめとして、多くの実行委員の先生方が、熱心に動いているのを拝見いたしまして、本支部のパワーを改めて感じた次第でございます。

本年度はこの後に、緑陰セミナー、夏季研究発表会、公開セミナー、氷雪セミナー、冬季研究発表会と各種行事が目白押しに続きます。これらの行事が熱心な支部会員で支えられていることも会員の一人として理解しなければならないことをつくづく感じている次第でございます。このような活動に対して、支部長といたしましてできる限りの支援策を考え、力を入れていきたいと思っております。

本支部の更なる充実と発展のためには、支部会員の拡充、特に今後を担う若い会員の入会を促す必要があります。同時に、企業を中心とした実学的な研究を包括し、会員拡充を図っていくことも大切なことであり、今後とも皆様の一層の協力をお願いいたしまして挨拶にさせていただきます。(くろさわ・たかお)



これまでの終了行事報告

第48回氷雪セミナー

年初めの恒例行事である氷雪セミナーが、2013年1月12日(土)・13日(日)の両日に、かんぼの宿小樽(小樽市朝里川温泉)において、25名の参加者で開催されました。講演題目は、「生命の材料は



宇宙の氷雪の中に一彗星に含まれる有機化合物から探る太陽系の歴史」藪田ひかる先生(大阪大学大学院理学研究科)、「ルミネッセンス可視化技術をベースとする海洋流体計測」渡部靖憲先生(北海道大学大学院工学研究院)、「褐藻の受精・発生と生活制御、及びゲノム解読から見えてきたこと」本

村泰三先生(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)、「環境放射線(能)モニタリングの役割」藤吉亮子先生(北海道大学大学院工学研究院)でした。いずれの講演も非常に興味深い内容で、活発な討論がありました。また、懇親会においても、講師の先生方を囲んでの和やかな宴となり、親睦を深めることができました。

(北海道大学大学院工学研究院
福嶋 正巳)

化学系学協会北海道支部 2013 年 冬季研究発表会

化学系学協会北海道支部 2013 年冬季研究発表会(共催:日本分析化学会・日本化学会・触媒学会・電気化学会・腐食防食学会・表面技術協会・石油学会の各北海道支部)が、2013 年 1 月 29 日(火)・30 日(水)の両日、北海道大学学術交流会館で開催されました。188 件の一般講演(口頭発表 114 件およびポスター発表 74 件)と 1 件の特別講演が行われ、活発な質疑応答や議論がありました。特別講演には、東京大学大学院工学系研究科の藤田誠先生=写真下=をお招きし、「自己組織化によるナノスケール物質創成」と題してご講演いただきました。また例年通り、学生の講演に対して優秀講演賞が選定されました(口頭発表 8 件、ポスター発表 5 件)。今



賞状を手にする優秀講演賞受賞者のみなさんと実行委員長の村越先生(右)

年は、2月8日に北海道大学理学研究院にて実行委員長の村越敬先生より受賞者への表彰状の授与が行われました(旭川高専の受賞者2名については、2月22日に旭川市クリスタルホールにて、石油学会北海道支部長の松橋先生より授与)。参加登録者数は456名(一般122名、学生334名)でした。1月29日(火)の18時から、北海道大学ファカルティハウス「エンレイソウ」レストランエルムにて懇親会が開催されました。藤田先生を含め43名の参加のもと、盛況な会となりました。

(北海道大学大学院工学研究院 谷 博文)

第73回 分析化学討論会



会場（北大水産学部）

第73回分析化学討論会
が、2013年5月18日(土)、
19日(日)の両日、北海道
大学函館キャンパス(水産
学部)で開催されました。
開催前々日までは寒くてど
うしようもなく、既に稼動シ
ーズンを終えていた暖房を
どうするかと真剣に考えま
したが、前日から天気は劇

的に変化し、当日は5月半ばとしてはこれ以上望
めないような好天に恵まれ胸をなで下ろしました。
キャンパス内には桜も咲き残っていて、本州からの
参加者は写真に納めるなど北の春を楽しんでいた
ように思います。

本討論会への参加登録者は736名(予約登録
者593名、当日登録者143名)を数え、講演件数
は490件(一般講演:口頭213件、ポスター109件;
主題講演12件;若手ポスター130件;テクニク
レビュー:口頭発表9件、ポスター発表3件;依頼講演14
件)に上り、2005年の北見大会(参加登録者717
名、講演件数478件)とほぼ同規模の討論会になり
ました。

今回の討論会では「3.11」、「宇宙と生命」、「海」、
そして「分析化学」をキーワードに以下の3つの主
題について討論しました。各主題のオーガナイザ
ーから寄せられた報告を以下に記します。

(1) 3.11 から考える分析化学 —復興・研究・教育— (オーガナイザー: 田中俊逸、北大院環境; 豊田 和弘、北大院環境; 藤吉亮子、北大院工)

2011年3月11日の東日本大震災とそれに続く福
島第一原子力発電所の事故においては、地震と津
波によって多くの犠牲者が出るとともに、放出された
放射性物質による環境汚染が広い範囲で起こった。
この震災と事故を通じて現代の科学技術のもろさが
露呈された反面、その必要性もモニタリングや除染、
新エネルギーの分野で高まっている。震災による環
境汚染に対してこれまで分析化学が大きな役割を果
たしてきた。しかし、汚染状態の修復は遅々として進
んでおらず、地域住民の生活と健康についても十分

安心できるところまで回復していない。そのため本シ
ンポジウムでは、3.11以降の様々な復興への取り組
みや対策の中で、分析化学が果たしてきた役割、ま
たは今後果たさなければならない役割について、これ
まで実際に福島を中心に様々な活動を行ってこられ
た研究者の講演を聞きながら考えることとした。依頼
講演として、以下の4名の先生方に講演をいただいた。
1. 放射性物質の水産物への影響(森田貴巳、
水産庁)、2. 福島県における除染と発生する廃棄物
の管理に関する現状と課題(佐藤正知、福島高専)、
3. 大気環境放射性物質の動態理解と放射性物質
分析の課題(渡邊明、福島大)、4. 3.11から始ま
った北大における人材育成(藤吉亮子、北大院工)。こ
の他に主題講演3件の発表が行われ、今後の復興・
研究・教育に対して活発な討論がなされた。聴衆者
は60名程度であった。

(2) 宇宙と生命の謎に迫る—分析化学の挑戦— (オーガナイザー: 福嶋正巳、北大院工)

無限に広がる宇宙の一つである地球では、人類を
はじめとする様々な生物が今日まで活動を続けてき
た。しかし、我々は他の天体にも生物がいるのか?
あるいは、自分たちの起源が何でありどのように進化
してきたのか? 十分な理解を得るには至っていない。
はやぶさが持ち帰った宇宙塵や隕石にはそれら疑問
の回答を得る手がかりが隠されていると思われる。

しかし、これ
らの試料は
稀少で生命
と関連のある
有機物の含
有量が非常
に少なく、多
くの情報を
得る上で分



口頭発表会場

析化学の発展と進歩は欠かせない。本シンポジウム
では、宇宙と生命誕生の謎の解明に対して分析化
学が担うべき役割について討論した。依頼講演とし
て、以下の4名の先生方に講演をいただいた。1.
サンプルリターンにおける放射光軟X線分光分析の
役割: 惑星物質探査から将来生命探査まで(藪田ひ
かる、阪大院理)、2. はやぶさとその先—分析化学
の発展に期待すること—(坂本尚義、北大院理)、3.
縞状鉄鉱層の微量元素・同位体分析によって紐解く

地球と生命の共進化（大竹 翼、北大院工）、4. 宇宙に生命の起源を探る（小林憲正、横浜国大院工）。このほかに主題講演1件の発表が行われた。会場は立ち見が出るほど盛況で、宇宙地球化学分野で用いられている最新の分析技術に対して終始活発な討論が行われた。

(3) マリンサイエンス – 分析化学からのアプローチ – (オーガナイザー: 久万健志、北大院水)

地球表面の 70%を占める海洋は地球の気候、物質循環及び生態系の変動に大きく関わっており、海洋環境変動の把握及び海洋資源の利用と保全は、人類生存にとって重要な課題である。本シンポジウムでは、海洋における物質循環、海洋生物からの生理活性物質等の探査と解析に関して、分析化学からのアプローチについて討論した。依頼講演として、以下の4名の先生方に講演をいただいた。1. 現代海洋の生物活性微量金属のマッピング（宗林由樹、京大化研）、2. 分析化学的アプローチによる海洋炭素循環の時空間変動の把握（渡邊 豊、北大院地球環境）、3. 微量海洋生物毒の探査、監視における分析化学の役割（鈴木敏之、渡邊龍一、松島良次、村田昌一、水産総合研究センター中央水研；内田肇、永井宏史、東京海洋大）、4. 藻類脂質の機能性解析（宮下和夫、北大院水産科学）。会場はほぼ満席状態であった。このほかに主題講演7件の発表が行われ、最新技術に対して活発な討論がなされた。なお、本討論主題に関する研究論文が「分析化学」誌に特集される予定である。

若手企画シンポジウム(オーガナイザー: 山田幸司、北大院地球環境; 石田晃彦、北大院工; 中谷暢丈、酪農学園大環境システム)については以下のとおりです。

討論会初日に若手講演ポスター発表が行われ、131 件もの演題が集まった。例年通り、若手交流会各支部から選出された一般会員による審査が行われ、星野笑美(慶大院理工)、小池優子(群馬大院工)、平野新太郎(阪市大院工)、鈴木哲仁(京大院農)、林 美香(静岡県大院食品栄養)の計5名が若手ポスター賞に選出された。また、若手研究者同士の情報交換と交流の促進、および、倫理・行動規範を啓蒙する目的で、若手講演ポスター発表者にも審査をお願いした。本会会員倫理・行動規範を配布の



ポスター発表会場

上、自身のコアタイムと利害関係者以外の発表に対し審査をお願いしたところ、若手研究者同士の議論も活発に行われ、90 票もの有効投票が得られた。集計の結果、澤村大地(東理大理)、松本 歩(京大エネ理工研)、水野 初(広島大院医歯薬)の計3名が学生審査員特別賞に選出された。各賞の表彰式は、懇親会に先立って行われ、賞状および副賞が受賞者に授与された。若手ポストシンポジウムは、討論会終了後の 19 日夕方から湯の川プリンスホテル渚亭で行われ、全国7支部から参加があり、平日にもかかる日程の中 19 名もの参加者が集った。講演会として、地元函館の下野功先生(北海道立工業技術センター)と岸村栄毅先生(北大院水産)に、それぞれ「ホタテ貝殻の光り輝く機能とその応用の提案」と「紅藻ダルスの機能性タンパク質」の演題で、分析化学にも関わる非常に興味深い研究成果をご講演頂いた。その後、夕食も兼ねて支部の活動報告が行われ、活発な支部行事についての情報交換が行われた。懇親会では、講師の先生2名にも加わって頂き、夜遅くまで交流が深められた。

例年討論会では、ランチョンセミナーは実施していませんが、本討論会では昼食時の学内生協食堂の混在を避ける目的もあって、企業4社(アジレント・テクノロジー、サーモフィッシャーサイエンティフィック、メルク、パーキンエルマージャパン)によるセミナーを開催しました。ICP-MS と超純水に関する話題提供があり、いずれも整理券は「完売」し好評でしたが、学内食堂の「入り」は、予想をかなり下回り、土日に特別営業していただいた生協には申し訳ない気がしました。もう 1 つ、本部主催の「女性研究者のためのキックオフミーティング」(オーガナイザー: 金澤秀子、慶応大学)もランチョンセミナーの形式で行われ、予定した約 50 名が参集し盛会でした。

懇親会は函館山の麓に位置する五島軒本店で行われ、263 名(招待者を含む)もの多くの方々に参加していただきました。従来の式次第を少し変えて、乾杯の前に学生賞の表彰式を行いましたので、食べ物を目の前にして(自由に飲めるようにはしましたが)まだかと落ち着かなかった方もいたかも知れません。また、カニやウニなどの北海道ならではの魚介類をふんだんに味わうことを期待していた方には少し物足りなかったかもしれませんが、北海道では最古と言われる老舗レストランでの懇親会でしたので、多くの方に満足していただけたものと思います。司会も女性、乾杯の発声も女性(慶応大学 金澤先生)、そして余興として北大水産学部出身の女流クラシックギタリストの宮下祥子さんに演奏をそれぞれお願いしました。宮下さんには、両日の昼休み時間にも会場内で演奏していただきました。ギターの好きな参加者は熱心にその演奏に耳を傾けていました。プロの演奏を身近で聴けて感動しましたとの感想がいくつも寄せられました。

今回の討論会から、日本分析化学会用にカスタマイズされたオンライン参加申込登録システムが使用され、要旨集も冊子体から電子配布に変更になって、従来とは大きく異なる方法で本討論会が実施されました。実行委員会は学会本部事務局及び業務委託

先の(株)国際文献印刷(討論会ヘルプデスク)と綿密な連絡をとりながら、使い勝手のよいシステムの構築と運用に取り組んで本番に臨みました。討論会終了後に参加者に実施したアンケート調査によれば、個々には辛辣な意見もありましたが 80~90%の方が、このシステムをよしと回答されたのは幸いでした。また、討論会運営全般についても、素晴らしい討論会だった(26%)、まあ良かった(51%)、ふつう(15%)と評価され、合格点は得られたように思います。一方で、ある講演では多くの聴衆が押しかけて会場が混雑したことから会場の狭さや実行委員会の不手際を指摘した厳しい意見もごく少数ですがあったのは残念なことでした。会場へのアクセスの悪さについての不満もありました。これらは反省点として、今後地方都市で開催する場合の参考にして欲しいと思います。

本討論会を開催するにあたり、献身的に力を尽くしていただいた実行委員の皆様並びにご支援いただいた函館市、(一財)函館国際水産・海洋都市推進機構、北大水産学部、学会本部事務局の関係各位に感謝いたします。広告掲載等でご協力いただいた企業各社とアルバイトの学生の皆さんにもお礼申し上げます。そして何よりも函館にお越しいただいたすべての参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。

(北海道大学大学院水産科学研究院
実行委員長 板橋 豊)



これからの行事予定

2013 年 夏季研究発表会

日本化学会北海道支部 2013 年夏季研究発表会が、7 月 20 日(土)に北見工業大学(〒090-8507 北見市公園町 165)で開催されます(主催:日本化学会北海道支部、共催:日本分析化学会北海道支部ほか)。詳細は、ホームページをご覧ください。
(http://homepage1.nifty.com/csjh/moyoshi_happ_yokai.htm)

131 件の口頭発表が、6 会場で行われます。特別講演は、15 時 15 分から高橋 修平先生(北見工業大学工学部社会環境工学科教授)による「南極観測と地球環境」と、16 時 05 分から橋本 和仁先



生(東京大学大学院工学系研究科 東京大学先端科学技術センター教授)による「社会の期待する基礎研究—研究者としての視点と科学技術行政からの視点」です。懇親会は、同日 18 時から「オホーツクビアファクトリー(地ビールレストラン)」=写真右上=で開催されます。

(北見工業大学マテリアル工学科・南 尚嗣)

第29回 緑陰セミナー

本年度の緑陰セミナーが、例年とは時期をずらして10月19日(土)、20日(日)の両日、旭川ビューサイドホテル雪の宿(予定)=写真右=で開催されます。4名の講師の方々に講演をお願いしており、岡山大学の金田隆先生には「バイオ分析化学の新展開を目指して」、北海道大学の渡慶次学先生には「マイクロ・ナノ流体デバイスによる分析・医療応用」、旭川工業高等専門学校の堺井亮介先生には「色彩可変高分子を利用したキラリティーの可視化」、



そして株式会社ワンダーワークスの田村新吾先生には「イノベーション行動

論」と題してご講演いただく予定です。また例年通り学生のポスターセッションや懇親会での研究室紹介も予定しております。詳細な会告については、また改めてご連絡いたしますが、多くの会員にご参加いただけますこと心よりお待ち申し上げます。

(北海道大学大学院工学研究院 谷 博文)

2013年度 公開セミナー

開催内容の詳細が決定していませんので、今回は概要のみお知らせ致します。開催時期は、10月又は11月の午後を予定しております。開催場所は

札幌市内で検討中です。「環境分析をテーマとした演題」を2題講演していただく予定となっております。参加費は無料で、事前の登録も不要となっております。詳細は、決まり次第追ってご案内致しますので、会員の皆様のご参加をお待ちしております。

(北海道三井化学㈱ 工藤 英博)



2013 CALENDAR

開催日	事業名	開催地	担当幹事
【2013年】			
7月20日	2013年 夏季研究発表会	北見	南 尚嗣
8月中旬	2013年度 役員候補者選考委員会	札幌	
10月中旬	第2回 幹事会	札幌	
10月19日 ～20日	第29回 緑陰セミナー	旭川	谷 博文
10-11月予定	2013年度 公開セミナー	札幌	工藤 英博
11月予定	北海道地区化学教育研究協議会	札幌	諸角 達也
11月中旬予定	2014年度 学会賞等受賞候補者推薦及び 2013年度 北海道分析化学各賞受賞者選考委員会	札幌	
12月中旬	支部ニュース第48号		富田 恵一 川口 俊一
【2014年】			
1月予定	第49回 冰雪セミナー	未定	坪井 泰之
1月28日(火) ～29日(水)	化学系学協会北海道支部2014年 冬季研究発表会 (2013年度 北海道分析化学各賞授賞式)	札幌	谷 博文 石田 晃彦
2月下旬予定	審議会(第3回 幹事会)	札幌	

2013年度 支部役員

支部長	黒澤 隆夫	北海道医療大学
副支部長	宇都 正幸	北見工業大学
	久万 健志	北海道大学大学院水産科学研究院
庶務幹事	村井 毅	北海道医療大学
	蠣崎 悌司	北海道教育大学札幌校
会計幹事	吉村 昭毅	北海道医療大学
	佐々木胤則	北海道教育大学札幌校
監査	大澤 雅俊	北海道大学触媒化学研究センター
	森田 みゆき	北海道教育大学札幌校
他	参与 21 名 幹事 46 名	
事務局	〒061-0293 石狩郡当別町金沢 1757 北海道医療大学内 公益社団法人日本分析化学会北海道支部 支部長 黒澤 隆夫 TEL : 0133-23-1266 E-mail : jsac-hb@w9.dion.ne.jp	

2012年度 会計報告の概要

支 出		収 入	
会議費	285,380	支部費補助金	874,500
講演会費	10,000	学会賞推薦委員会	10,000
研究発表会費	280,000	印税収入	212,686
セミナー費	495,000	受取利息	438
書籍出版費(印税)	81,100	次年度繰入金	567,636
書籍編集費	33,090		
北海道分析化学賞等経費	71,352		
学会賞推薦委員会費	9,028		
通信運搬費	45,106		
事務・消耗品費	48,698		
旅費交通費	0		
印刷費	58,290		
HP 管理費	8,216		
事務委託費	240,000		
支出合計	1,665,260	収入合計	1,665,260



支部会員の欄

この欄では分析化学会北海道支部の転入や転出、新入会など会員に関する情報をお伝えします。次の方々の入会が認められた(「ぶんせき」誌 2013 年 1 月号～6 月号のお知らせ欄掲載分)ほか、転入及び退会の情報をお寄せいただきました。会員に関する情報をお持ちの方は、支部ニュース編集委員までお知らせください。

新入会のみなさん

市橋 大山(北海道立衛生研究所)	坂本 広太(北見工業大学)
大木 淳之(北海道大学大学院水産科学研究院)	鈴木麻莉奈(北見工業大学)
松永 智子(函館工業高等専門学校)	羽深 昭(北海道大学大学院工学研究院)
小野 力(北海道大学大学院理学研究院)	平野 満大(北見工業大学)
菊池 真登(北見工業大学)	山田 健太(北海道大学)
木村 錬(北海道大学大学院水産学部)	荒井 大輝(北海道大学大学院)
小西 順貴(北海道大学大学院水産学部)	藤本 明弘(北海道教育大学札幌校)
(敬称略、順不同)	

編集後記



支部ニュース第 47 号をお届けいたします。この度、ご多忙の中、ご執筆頂きました黒澤支部長をはじめ執筆者の皆様には、この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

編集委員は初めてなこともあり、いろいろと失礼や不手際があったかと思います。この場を借りましてお詫び申し上げます。また、会員の皆様には次号以降も原稿の執筆をお願いすることもあるかと存じますが、その際は何とぞご協力お願い致します。よりよい形で届けられるよう尽力いたしますので、今後とも、ご指導ご鞭撻いただければ幸いです。

(編集委員：富田 恵一、川口 俊一)

北海道支部ニュース第47号
日本分析化学会 北海道支部

◆ 事務局

〒061-0293 石狩郡当別町金沢 1757
北海道医療大学内
公益社団法人日本分析化学会北海道支部
支部長 黒澤 隆夫

TEL : 0133-23-1266 / E-mail : jsac-hb@w9.dion.ne.jp

◆ 編集

発行

◆ 発行日

公益社団法人
日本分析化学会北海道支部

2013 年 7 月 15 日